

まちづくり ひろしま

第39号 (平成31年1月15日)

読者数：632名 (募集中)

メール：hirosima.idea.c@chugokuc.co.jp

〒733-0002 広島市西区楠木町1-9-7

発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二

配信元：広島アイデアコンペ実行委員会

ご提案・ご意見等は、こちらまで

被爆100年(西暦2045年)の姿をめざして

□ 巻頭言

日常の文化を支える街に ～市民の音楽活動の歴史を見て思う～

「ヒロシマと音楽」委員会 能登原由美



「平和」という冠を外した広島とは

私はこれまで20年以上にわたり、被爆地広島に関わる音楽について調査を行ってきた¹⁾。その中で見えてきたのは、被爆の荒廃から立ち上がるべく「平和都市」として生まれ変わった広島が、やがて「反戦・反核」、「平和」の象徴とみなされるようになり、世界中から「平和都市」としての役割を期待されるとともに、自らもその使命を意識するようになったことであった。

確かにそれは、今の広島を形作っている礎石の一つである。けれども一旦、その「平和都市」としての役割を横に置いてみたい。つまり、「平和」という冠を外した時の「広島」はどのような街なのか。そもそも、その冠を付ける前の広島ではどのような営みがあったのか。それを見ることで、今ある広島のもう一つの礎石が露わになってくるのではないだろうか。

というのも、戦後の広島では被爆地の側面に目が奪われがちで、戦前から有していたこの土地の歴史や文化が見えなくなっているような気がしてならないのである。

戦前の広島の音楽活動

よく知られるように、広島は軍都、学都として発展してきた街である。明治に入り、陸軍第五師団や広島高等師範学校などの要衝施設が置かれ、そのために多くの人材が広島に入り、また広島から巣立っていった。

音楽においてもその影響は計り知れない。特に明治政府が推し進めた欧化政策とともに急速に流入してきた西洋音楽の影響は、東京から遠く離れた地方都市であるにも関わらず、これらの国家機関を通じて早くから見られ始めた。軍楽隊の活動のほか、「丁未音楽会」として知られる広島高師教員らによる洋楽演奏会の開催などがその例である。

けれどもここで注目したいのは、こうした中央からやってきた専門家による音楽活動ではなく、広島市民が自ら行っていた演奏活動である。例えば、明治30年頃には「広島音楽隊」なるアマチュア・バンドが発足している。あるいは、中島本町にあった浄寶寺（被爆後は大手町に移転）では大正時代に管弦楽団が組織され、ラジオ出演を行うほどまでに研鑽を積んでいる。

洋楽ばかりではない。薩摩琵琶の大会も頻繁に行われ、さらに浪曲ともなると広島は他の都市以上に盛んであったと言われる。何よりも、被爆したその年の秋から歌謡大会などが次々と開かれている事実をみると、広島の人々にとって音楽が復興の励みになっていたと思われるのである。

その後、プロの交響楽団の誕生、他都市に先駆けて活発化した市民によるオペラ上演、全国有数の合唱県としての実績の積み重ねなど、戦後の広島で見られた活発な音楽活動は、戦前から広島で育まれた音楽愛好熱の延長にあったのではないかと思われるのである。

音楽活動の要となる場所を

けれども残念ながら、現在の広島がこうした古くからの文化的土壌を生かした街であるように

は見えてこない。もっとも大きな問題は、音楽愛好者の誰もがその活動の中心地と思えるような場所、つまり音楽ホールを持っていないことである。

現在、演奏会などで使用されているホールは多目的ホールであることが多く、音響的に好ましいとは言えない。たとえ音響上は良いとしても、大きな舞台作品の上演は物理的に困難などの制約がある。プロの交響楽団を抱えながらも、また活発なオペラ上演は行われながらも音楽ホールがないのは広島ぐらいかもしれない。

一方で、「平和」と名のついた音楽イベントは頻繁に行われ、県が主導して「世界平和の実現」という志のもと、大きな音楽祭も開かれている。決してその志を否定するわけではない。「平和」という大きな冠を今後支えていくためには、まずはこれまでの広島の歩みを振り返りながら、人々の日常の文化に目を向け、支えていくことが必要なのではないだろうか。

注 1) さらに筆者は、広島市が 2018 年に刊行した『広島市被爆 70 年史』において「広島と音楽」の項目を担当した。この中で、明治から平成までの広島における音楽の歴史について概説している。

ひろしまのまちづくりの動き

① 旧広島大理学部 1 号館の活用策！

旧広島大学理学部 1 号館の活用策について検討している市の有識者懇談会は昨年 11 月、広島大平和センターと広島市立大広島平和研究所を 1 号館に統合・移転して、新たに「ヒロシマ平和教育研究機構」（仮称）を設置する提案を行った。

1 号館に関する被爆資料の展示や世界の被爆に関する学術的な情報提供など、平和教育・研究と情報発信の国際拠点を目指すべきとしている。

その提案を受けて松井市長は、その方向で広大と市立大に要請したと市議会で答弁。これから 3 者で施設の改修内容や新組織の運営体制などを協議することになるが、どこまで市がリーダーシップをとることができるかが課題である。

市は 2017 年に 1 号館の正面の棟を I 字型に残し、平和教育・研究の拠点や市民の交流施設とする保存・活用方針を決定している。また耐震性の問題があり、耐震改修費用は概算で 18 億 5 千万円が見込まれている。

どんな組織の管理運営体制を作り、どういう風に施設を改修するのか具体的に詰めていかなければ、必要予算も把握できないし 3 者の負担額も定まらない。

広島県も 2011 年に「国際平和拠点ひろしま構想」を表明し、同じような平和のための人材育成や研究拠点の形成を目的に「ひろしま平和研究・教育機関ネットワーク」を設立している。同じ目標に向かって県と市が連携し、1 号館の平和教育研究施設としての活用を図っていく必要がある。

② 旧広島陸軍被服支廠の活用策！

広島県は被爆建物「旧広島陸軍被服支廠」の 1 号棟を改修し、被爆の実態を伝える平和学習の拠点として整備する。改修案によると、1 号棟と 2 号棟の間に見学者が被爆証言などを聞くスペースやトイレなどを備えた見学者用建物（平屋、約 130 m²）と 1 号棟の北側に駐車スペースを新設。

併せて 1 号棟の劣化の激しい屋根や外壁の改修と敷地内の雨水を処理する排水路を整備。概算の事業費は 3 億 8 千万円で、1 年半程度の工期を想定し、新年度の予算が認められれば、2020 年度に完成予定。

施設の見学者も増加傾向にあり、被爆建物による平和発信に期待が持てる大きな一歩である。内部の利用は耐震改修が必要となり、多額となるため足ふみ状態。

今回は 1 号棟のみの活用であり、残り 3 棟は手つかず。各棟とも 5000 m²前後の大規模な施設なので、活用策を探るのも容易ではないが、ビジョンだけでも早く全体像を示して欲しい。



中国新聞 2018. 12. 11



中国新聞 2018. 12. 5

○ 広島復興の軌跡・人物編（第14回）～藤本千万太広島市長室職員（後編）

～堅実な業務推進能力と重要資料所蔵の努力及びその実行力～

（引き続き、藤本千万太の活動状況・実績について記述を進める）

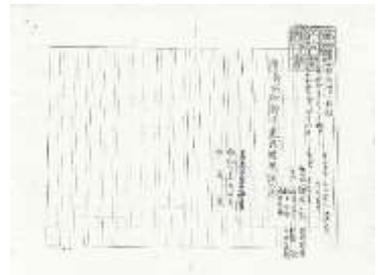


4. 丹下と共に平和都市建設計画への関与

ここで関係者の一部には知られているが、多くの人には知られていないことを紹介しよう。昭和24年に実施された平和記念公園コンペで丹下グループ案が1等入選したことはよく知られている。そのコンペ実施の拠り所となったのが、昭和24年5月に国会両院を通過した「広島平和記念都市建設法」（平和都市法と略す）であることも確認しておきたいことである。

表1 平和都市建設関連の計画書（西暦表記）

番号	計画名	計画主体	計画・発表時期	計画書の形式・ボリューム(表紙除)
計画書①	広島平和記念都市建設総合計画書(案)	広島市	1949年9月23日	本文 B5版 8頁、表 23枚、図4枚、コピーでB4版にして37枚
計画書②	広島平和記念都市建設事業計画案	広島市	1949年10月3日	本文 B5版 9頁、図表 B4版 10～27頁
計画書③	広島平和都市建設構想案 1949年版	広島市役所市長室	1950年2～3月(不明)	本文(図表も組込) B4版 199頁
計画書④	広島平和都市建設構想案	広島市役所市長室	1950年4月	本文(図表も組込) B4版 185頁
計画書⑤	広島平和都市建設構想案	広島市役所市長室	1950年4月	本文(図表も組込) B4版 92頁
計画書⑥	広島平和都市建設構想案	広島市役所市長室	1950年10月	本文(図表も組込) B5版 140頁
意見書①	広島平和記念都市建設計画についての意見書	広島平和記念都市建設専門委員会	1951年8月6日	



資料1(上)計画書③表紙
資料2(下)計画書④表紙

それではこの平和都市法はどのように適用され、実際の広島の都市建設において役割を果たしたのであろうか。そのことを説明するものとして、図書館や公文書館に収蔵されている当時の計画書をリストアップするなら表1のように6つの計画書と1つの意見書が存在する。すなわち昭和24年9月、10月に相次いで策定された建設計画書・計画案(①、②)が存在しており、昭和25年4月の計画書③、同年5月計画書④と続き、さらに⑤、⑥、意見書①と続く。

そこでこの計画書③、④こそ、重要な意味があることを指摘しなければならない。というのは、昭和25年4月7日付の藤本宛の丹下書簡6において「〇〇については御上京の節にご相談しましょう」とあり、「銀山君の御上京をお待ちいたします」とあるように、広島市(市長室中心とした関係当局)と丹下の協働作業が展開され、計画書③が4月に策定されたことがわかり、やはり計画書④が5月に策定されたのである。

丹下は早くから市長室宛に「皆様の御上京を心待ちにしております。おもてなしも何もできませんが、ほんとうに御遠慮なく宿のつもりにして御上京いただければ幸いです。」とか「大学の浅田孝君、大谷幸夫君たちも皆様の御上京を心待ちにしております。お仕事のお役に立てばと申しております。」と書き送っていて、およそ現在では信じられないような丹下邸に市のスタッフを泊めて計画策定作業をしていたことが判明する。このように、丹下書簡が丹下らと市長室職員との協働作業の存在を立証しているのである。

5. 藤本らの関与の証拠

広島市の建設計画書はそれぞれ複数部確認されているが、藤本も各1部は保存していて、藤本が公文書館に寄贈した計画書の表紙には、計画策定の関係者と策定期間の詳細が



資料3(左)計画書③サインの拡大
資料4(右)計画書④サインの拡大

特定されるのである（資料1～4参照）。

すなわち、計画書③の表紙において「第一期作業／自昭和二十四年十一月一日至昭和二十五年二月四日」と作業日程が書かれていて「東京大学丹下健三、浅田孝、織田技手、銀山技手、藤本主事」とあり、計画書④の表紙においては「第二期作業／自昭和二十五年二月四日至昭和二十五年四月二日、東京大学丹下健三、浅田孝、大谷幸夫、広島市市長室室長難波巖、主任藤本千万太、銀山匡助(以下略)」とあり、それぞれ藤本の関与が明らかとなる。計画内容は別途考察する必要があるが、広島平和都市建設計画はかくなる日程と態勢によって策定された。こうして、復興事業の原点が藤本らの貢献によって形成され、以後、展開されたことがわかる。

6. まとめにかえて一ここで問題提起

ところで計画書①、②段階から③、④段階に移行したとき重大な変化が見られる。それは、それまでの計画が「平和記念都市建設計画(案)」であったのに「平和都市建設計画(案)」と変更されたことである。これは丹下の関与による方針転換と考えられる。そもそも広島市における復興計画を平和記念都市計画と表現することになったのは、平和都市法成立に基づいたものであったので、平和都市法制定直後には「平和記念都市建設」と呼ばれたのに、丹下の関与の過程で「記念」という表現が消えていった。それは何故か。丹下が「記念」の表現を好まなかったからと思われるが、その理由は何か、それぞれ解釈してみたい³⁾。

藤本らの広島復興計画への関与・貢献から始まって、平和都市・平和記念都市に関する基本的な問いかけで終わるが、これも丹下と共に藤本が残し大きな足跡といえるであろう。

注3)「記念」の有無の扱いは行政上明快ではなく、市民レベルでも必ずしも厳格に峻別していないが(例えば平和記念公園、平和公園のように)、丹下には明確なこだわりがあったと思われる。
(編集委員 石丸紀興)

○ 本「ひろしま地歴ウォーク」紹介

街歩きのエスコート役を目指し、広島の地理や歴史の専門家、広島の街や地域情報に精通する人たちが結集して書き上げた本である。

「広島の人に自分が暮らす街の地理や歴史を知ってもらい、街を歩くことで、もっと好きになってもらう」ことをコンセプトにまとめている。



☆ 全編の概要

1 デルタの街を歩く

広島のデルタの成り立ちと広島城の位置の選定理由を紐解き、干拓によるデルタの成長と水害の歴史を紹介。その水害対策から太田川放水路が整備される。また川を利用した水運が発達し、船着き場の雁木がいたるところに残る。特に京橋川の雁木群は土木学会の選奨土木遺産に選定される。

2 広島歴史を歩く

広島の町の歴史は毛利輝元の築城によりスタート。江戸時代には城下町として栄え、明治へと時代は移っていく。ここでは町づくりの契機となった広島城と城下町に焦点を絞って解説し、昔の町の区画・道路、建物の跡など今も残る歴史の痕跡を紹介。

3 “廣嶋”を歩く

明治以降の広島の町は陸軍の拠点都市としての歩みであり、日清戦争時には広島城内に大本営が置かれ、「軍都」となった。陸軍があった時代を「廣嶋」と表し、街の中には陸軍施設の跡や軍需施設の跡などその痕跡が多く残っている。

4 “ヒロシマ”を歩く

原爆投下により壊滅した広島の町は先人の努力により奇跡的な復興を遂げる。その戦後歩んだ被爆都市の姿を「ヒロシマ」と表す。広島平和記念公園を始め、被爆建物や慰霊碑、被爆樹など街のいたるところでヒロシマに出会うことができる。

5 カープの街を歩く

広島に生まれた親会社を持たない市民球団カープは県民・市民に支えられ、カープ誕生から初優勝までの軌跡は広島の復興の歴史でもある。旧市民球場からマツダスタジアムに移転し、若いファン、特に女性ファンが増え、新たな名所やカープ神話が生まれつつある。

かつてのカープ選手であり、カープOB会名誉会長の長谷部稔氏によるインタビューでは創設期の興味深い話も収められている。

6 “ひろしま”を歩く

前節までに含まれない多方面における今の姿を「ひろしま」と表す。広島発の音楽・映画・スポーツ、路面電車や橋、水辺空間など広島ならではの魅力を紹介。

最後に宮島の町並みや歴史にも触れている。

コメント

街角に立って対象を漠然と見るよりも、その背景や歴史を理解して見る方が心に残るし、愛着が湧く。広島をもっと知りたい人には貴重なガイドブックとなるであろう。

(編集委員 瀧口信二)

注) 定価：907円＋税、発行人：空の下おもてなし工房、発行：2018年3月30日

□ ほっとコーナー

「つづける」は、つづく。

コピーライター/放送作家 角田雅子

広島に「3連覇おめでとう」の文字が躍った昨年。期待されながら結果を出しつづけるのは、すごいことだと心から尊敬しました。コツコツとか、あきらめないとか、選手たちの仕事ぶりを語る言葉はどれも、私の辞書にはないからです。

けれど、コツコツの代名詞のような新井貴浩さんが、プロ20年目で現役を引退すると知ったとき、ふっと自分自身の20年が頭をよぎりました。おこがましい話ですが、新井さんの親近感がそうさせたのだと、おゆるしてください。



目の前の締め切りに追われながら、ラジオ番組の放送原稿を書いてきた私の20年。パソコンの白い画面を見つめたまま時間だけが過ぎ、ひねり出すようにしてページを埋め、どうにか間に合わせたこともあります。頭から滑り込んででもセーフにするのは、仕事だからあたり前。ほっとしたら、また次の締め切りが待っています。

そんな日々を繰り返しているうちに、気がつけば、広島と山陰で担当している2つのラジオ番組は、どちらも20年以上つづく長寿番組になっていました。コツコツとは縁遠いと思っていた私にも、つづけてきたことがある。そのことを、新井さんが思い起こさせてくれたのです。

ある時期、ある言葉が、ストンと腑に落ちるような感覚も、20年の間に経験しました。まったくの正論だけど自分には出来ないと思っていた、「継続は力なり」という言葉です。と言っても、実力がついたと感じたのではなく、つづけてきたことを褒めてくださる方からほら現れはじめ、そのとき浮かんだ言葉が「継続は力なり」。誰かが見ていてくれた。あ、ラジオの場合は、聴いていてくれた、ですね。そう思うと、やはりうれしいものです。このようなご褒美は、どんな仕事でも、趣味やスポーツでも、何かをつづけていたら突然いただけるのかもしれませんが。

つづけることの難しさと、つづけることの喜び。みなさんもきっと、いろいろな場面で感じられているでしょう。昭和から平成へ、そして、今年新しい時代へ。広島に暮らす私たちには、この街で起った出来事を語り継ぐことも、一人ひとりに託されているのかもしれない。

さて、この「ほっとコーナー」もリレー形式でつづいているそうです。この方の話を読んでみたい。読んでもらいたい。そんな思いを込めて、私もバトンを渡します。

○ 「時代を語り建築を語る会 (第23回)」報告

語り人：平岡 敬氏 (元広島市長) ～市長時代を語る～

自慢話になるのが嫌だから控えてこられた元市長が重い腰を上げ、語る会に登壇。待望の市長時代の話をはじか聞くことができた。

主催：時代を語り建築を語る会実行委員会 (代表：石丸紀興)

日時：2018年12月8日 (土) 17:00～19:00

場所：合人社ウェンディひと・まちプラザ



略歴：1927年大阪府生まれ。早稲田大学卒業後、中国新聞社入社。中国放送社長を経て、1991年広島市長選で初当選。1999年まで2期在職。市長退任後は中国・地域づくり交流会会長など。著書「希望のヒロシマ」他。

☆ なぜ市長になったか

・ヨット好きでヨットハーバーを作りたいという思いあり。1980年代のバブルの時期は横浜みなとみらい21や六甲アイランド等、ウォーターフロント開発が盛んだった。調査団を組んで海外のリゾート地を調査したり、経済同友会の委員会で川と海を活かしたまちづくりを検討したり、あちこちで夢のあるアドバルーンを打ち上げていた。

・前任の荒木市長時代に広島の1994年アジア大会開催が決定していたが、開会が迫ってきても一向に盛り上がらない。バブルがはじけて金も集まらず、組織もバラバラで成功が危ぶまれていた。

・そんなことが伏線になって橋口商工会議所会頭から口説かれ、市長選に出馬するはめになった。1990年11月に中国放送社長を退任し、立候補して投票日まで短期間であったが、1991年2月に大差をつけて当選。

☆ 1994年広島アジア大会の成功

・**平和宣言** 第1回のアジア大会は1951年のインド開催。当時のネール首相がまだ国際社会に復帰できていない日本スポーツ団を招致してくれた恩義がある。アジアの多くの人たちは広島に原爆が落とされたことを是とし、日本の敗戦により軍国主義から解放されたと思っている。アジアの国々から理解と協力を得るためには謝罪から始めようと、初年度の1991年8月の平和宣言からその思いを込めた。

・**一国一館運動** 市長になって大会の機運を盛り上げるため、幹部会で小学生を動員しようという案を出したが、教職員組合が反対。代わりに出てきたのが、各地区の公民館を中心にして市民が一国・地域を応援しようという案。ボランティア元年と言われた1995年の阪神淡路大震災の前のことであり、市民ボランティアの走りであったと自負している。

・**アジア大会が残した遺産** 西風新都、アストラムライン、各区のスポーツセンターなどのハード面のほか、国際大会の開催ノウハウや一国一館運動による市民の国際交流活動。なによりもアジアのことを勉強し、理解を深めたことであり、今でも交流が続いている国あり。

☆ 1995年被爆50周年記念事業

・50年史等を発行したほか、被爆者のためになる事業として被爆者療養施設の神田山荘に温泉を掘り、地下1,700m位でやっと温泉脈に当たる。一般市民にも無料開放できるように思ったが、浴場組合からクレームが付き、被爆者と一般市民とで入浴料に差をつける。

・市民参加型の事業として「未来へのはがき」がある。被爆50年の市民の平和への思いを被爆100年の世界に届けようという趣向で、2045年にタイムカプセルを開けることになっている。9万通を超える応募があり、その一部は本として出版。若い人には覚えておいてほしい。

☆ ピークリ (ひろしま2045ピース&クリエイトの略称)

・被爆100年を目指して、デザインの優れた建築家に公共建築の設計を委ねて、個性的で魅力ある美しいひろしまのまちを創っていこうというもの。その頃、熊本のアートポリスで同じような動きが先行しており、市の建築の若手職員からの提案が上層部に上がり採用された。

・作品としては、矢野南小学校 (設計：富田玲子)、基町高等学校 (設計：原広司)、西消防署 (設計：山本理顕)、中工場 (設計：谷口吉生)、安佐南区総合福祉センター (設計：村上徹) ほか。それぞれ特色のある公共建築として市民に親しまれている。

・原広司設計の基町高校と同時期に建設された文部省の標準設計による舟入高校が比較され、市議会で「教育の平等の理念に反する」と追及されたが、「悪い方ではなく、良い方に合わせるべきだ」と答弁した。基町高校は以降、学力が向上している。

・年に1・2作品でも2045年まで続ければ、質の高い都市となり、市民が自分のまちに誇りが持てるようになることを目指したが、次の市長になり、財政事情も相まってトーンダウンしてしまった。

・平和大通りの活性化や旧日銀広島支店の活用について建築家安藤忠雄氏とデザイナー三宅一生氏に相談。大通りに市民のくつろぎの場としてオープンカフェを開き、三宅氏のデザイン・ミュージアムを作ろうという話がでて、廣大跡地を候補地に考えたことがある。

☆ 平和宣言

・平和宣言は、原爆死没者の追悼と核兵器廃絶及び世界平和を2本柱として、その時の国際情勢に広島市民として何を考えているか応えていくことが骨子となる。そこに市長の考え方が盛り込まれ、市長の世界観が反映され、その時代の記録ともいえる。

・初年度の1991年にアジアへの謝罪を盛り込んだことに対して、右翼から街宣車で怒鳴り込まれた。1995年の宣言は被爆50周年の記念すべき年であり、特に印象深い。

☆ 県との関係

・市長に就任して早々、竹下県知事と対談。宇品港地区のウォーターフロント開発を念頭に、港湾管理権を県から市に譲るようお願いしたら断られた。前市長との間で決着済みとのこと。

広島西空港の存続についてもお願いしたが、知事と前市長の連名で観音地区の反対住民と空港廃止の協定を締結済みとのこと。将来の航空機材や科学技術の進歩を考えれば、都市空港として残すべきだったと今も思う。

☆ 市長としてやり残したこと

・やり残したことが二つある。廣大跡地の整備について広島県庁の移転案までできたのに、今は切り売りされた状況で残念。もう一つは放医研の移転問題。1992年頃、アメリカと合意寸前までいったが、米大統領の交代で移転話が凍結された。

・1期目はアジア大会を成功させること、2期目は市民参加をテーマにボランティアを活用したまちづくりと、それから県境を超えた13市町による広域都市懇談会を立ち上げた。今の200万人広島都市圏構想の母体となる。70歳になったので続投を断念したが、3期目を務めるなら、消防、医療、福祉、水道等の広域行政に本格的に取り組むつもりだった。

☆ 広島市長の役割

・広島市長ならではの役割は、平和を訴えようとする「ヒロシマ」と市民の現実的な要望に応えようとする「広島」の乖離を近づけていくこと。平和を訴えていくことが市民の福祉向上につながるという道筋を説明していかなければいけない。非常に難しい任務である。

☆ 会場からの質疑

・今、コンパクトシティが叫ばれ、立地適正化計画が各都市で策定されている。都市が縮んでいくなかで、どう対処したらよいと思うか？ → 青森の方では失敗例もあるようだし、行政経費は削減されるが、周辺が荒廃していくと聞く。イメージが湧かないので、若い人に委ねたい。

自分のころは「対前年度比〇%増」の発想でやってきたが、今はそれが通用しない時代に突入している。新しい国家像を描いていかなければならないが、まだ見えてこない。

トップがこんなまちを作るんだと決断し、市民の賛同を得るだけの情熱をもって取り組まなければ前に進まない。

・40数年間アメリカに住み、最近広島に帰ってきた。国際的な緊張が続く厳しい世界情勢の中で、被爆した広島は世界に向かって何を訴えていくべきか？ → ただ世界平和や核兵器廃絶を訴えるのではなく、その向こうにどんな社会を築くのかビジョンを示すことが大事。

・被爆国日本が核兵器禁止条約に調印していないが、取り組むべき第一歩は何か？ 自分は教育と思う。→ 戦争への道、平和への道を開くのも、教育とマスメディアと思う。マスメディアの劣化が国民の意識を鈍化させているし、政治家も甘えている。市民は広島選出の代議士が本気で核兵器廃絶のために行動しているか検証しなければならない。

・広島市立大学の位置づけをどう考えているか？ → 廣大が市外に転出したので、若者を引き留めることと廣大にない学部・学科を新設して広島の将来を担える人材を育てること。付属の平和研究所は、市民の平和への願いを論理的に研究して国際社会に発信するために開設した。

(編集委員 瀧口信二)

平和の都市軸

技術士 片平 靖

原爆資料館のピロティの中心から原爆慰霊碑を見通すと、その先には原爆ドームがあり、さらにその先にはグリーンアリーナの屋根の二つの突起の真ん中を通っている。これが、丹下健三の「平和の軸線」であり、広島南北の都市軸である。もちろん、この南北の都市軸は東西の都市軸である平和大通りに垂直に立っている。



軸線北方向(広島市HP)

1949年に広島平和記念公園と記念館設計コンペにおいて、第一等に入選した丹下健三等4名のグループの提案で提唱されたものである。この設計コンペにおいて、他の応募者の設計案にはなかった、唯一都市の構造を考慮している卓越した設計であった。

この軸線は慰霊碑と原爆ドームを繋げていることはよく知られているが、南を向くと軸の起点である平和大通りには広島信用金庫から寄付された石灯籠が立てられ、土谷病院の外壁中央には帯状の白い壁が立てられている。

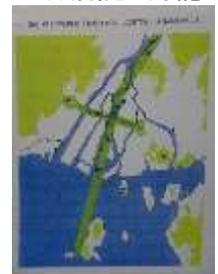
さて、その軸線をさらに南下すると、吉島の先にある広島市中工場のエコリアム（ガラス張りのトンネル）を貫通しているという話をよく耳にするが、これは正確ではない。平和の軸線をそのまま南に伸ばすと、中工場にはぶつからず、本川の右岸の堤防にあたる。

これは、平和記念公園から吉島の島を南北に通る幹線道路吉島通りが中工場のエコリアムを見通す位置にあるため、平和の軸線が通っていると勘違いするが、実際は吉島通りが加古町あたりから東に蛇行しているため、中工場は軸線よりは随分東の位置にある。



土谷病院と灯籠

ただし、「広島市総合計画書・基本計画-1985」（第一次総合計画）には、平和大通りを東西のグリーン（緑）の軸とし、平和記念公園から吉島通りと繋がる南北の緑の軸の構想が示されており、この南北の緑の軸上には中工場は入っている。つまり、中工場は丹下の提唱した南北の平和の都市軸上に入っているとも言えなくはない。



緑の軸

平和の軸線が、近年建設されたグリーンアリーナや中工場のデザインに反映されたのは事実であり、平和記念公園を規定した軸から広島の街の都市軸に昇華していると言える。

話は変わるが、比治山にある現代美術館をデザインした黒川紀章によると「現代美術館のアプローチプラザの切断面（写真参照）からムーアのアーチへの視線は自動的に爆心地を共示する照準器となっている（「新建築」1986.6）」とある。現地に立ってみると、確かに切欠き部分の中心とムーアを結ぶ延長線は紙屋町交差点付近、爆心地（島病院）方向に向いている。切欠き部分の角度は30°程度あり、その角度の延長上には爆心地や原爆ドーム、平和記念公園も内包している。



現代美術館入口

都市と建築物の話は興味深い。

○ 広島市中央公園を考える⑧ アイデアコンペ (平成23年) からの提案その2

これまで過去に中央公園のあり方について提案された内容を整理し、分析している。今回は、広島アイデアコンペ実行委員会が平成23年に実施した被爆100年広島市中央公園アイデアコンペの中から高橋志保彦氏の提案「大らかな風景～森と丘をつくる～」(特別賞)を紹介する。

大らかな風景～森と丘をつくる～

このアイデアコンペは、広島平和記念都市建設法を具現化するために、広島市中央公園をいかなるコンセプトを持って整備したらよいか、現実的な制約条件に捉われることなく、自由な発想で提案してもらった。この提案は一部既存の施設を残し、老朽化した施設を再整備しながら新しいコンセプトを付加している現実的で実現性の高い作品である。

テーマ：大らかな風景～森と丘をつくる～

1 森を造る一都心に深い森をつくる

現在の自由・芝生広場と中層の基町団地エリアに広島城の緑と対をなす森羅万象の森を造る。世界市民の森、命の森、パワースポットの森、森林浴ができる森、市民の散策ができる森。

2 丘を造る

一広島市街一望のビューポイントの丘、祈りの丘

現商工会議所ビルからファミリープールまでの川沿いのエリアを原爆ドームと平和記念公園を望める南面の丘にする。ひろしまが丘、祈りの丘。

丘はウッドデッキと芝で覆われ、緩やかな階段とスロープで構成。

丘の下は100本の柱(被爆100年)で支えられた建築空間。現こども文化科学館は残すが、青少年センターは建て替え、こども健康福祉センター(こども図書館を併設)を新設し、丘の下に収める。

光と風を取り込むため要所要所に中庭空間を造る。また丘の中央に空けられたスリットから各階にアプローチできると共に原爆ドームが望める。

3 沿道の高い建物を外す

一エリア内の建物を丘の懷に包み込む

広島商工会議所は丘の下に造り替え、PL教会は球場跡地東北角に移設。

4 緑の自由広場を造る

旧市民球場跡地に市民が自由に使える芝の多目的広場を造る。イベントや朝市も開かれる。

広場には自由に利用できる椅子を置き、利用者が風景を作る。

5 モールを造る

原爆ドームと平和記念公園を結ぶ丹下軸線上にモール(緑道)を造り、北端に地中の瞑想空間を配置。

6 瞑想空間

瞑想空間は10mの深さで、その断面(地層)は広島歴史を物語る。天井の中央に空けられた丸い穴から太陽が差し込み、時間が読み取れる。

7 歩行者空間で繋ぐ一市民の散策空間を作る

車と歩行者の分離を図り、中央公園全体を市民が安全に安心して歩けるスペースで繋ぐ。



鳥観図



全体配置図及び部分パース、断面図

8 エッグリングーたまご状歩道橋

広島グリーンアリーナと交差路をまたぐたまご状の歩道橋を設け、歩行者空間の連続性を作る重要な機能を果たす。

9 再生エネルギーシステムの構築

雨水は丘の斜面を利用し、全て地下貯水タンクに集約。中水利用。植栽散水、汚物排水。丘の上に太陽光発電パネルを設置し、太陽熱の利用。

(以上は高橋志保彦氏の提案の概要)

<コメント>

・高橋氏は横浜市の馬車道計画（横浜まちなみ景観賞）など都市環境のデザイナーとして著名な建築家である。呉市の美しいまちづくり賞も受賞。このアイデアコンペも中央公園の環境デザインの提案ということで関心を持たれ、参加されたものと推察する。

・このテーマのコンセプトは「平和を作ること」と公開討論会の席で本人が述べている。大らかな丘と森を造ることにより、平和の大前提となるコミュニケーションの場を作ろうと呼びかけ、その主張はこの提案の隅々まで読み取ることができる。

・一番のセールスポイントは「祈りの丘」と思う。原爆ドームが望めるようになだらかな丘を形成し、その下を建築空間として必要な建物を収容している。

同じようなアイデアは数案あったが、祈りの丘をサンクンガーデンと地下広場で原爆ドーム側までつなげた提案は独創的である。

・「世界市民の森」も木の持つ役割を十分に理解した上での提案である。都心の一等地に森などもったいないという反論もあると思うが、多くの市民に利用される潤いと憩いの場となれば周辺エリアの経済価値を高めることに寄与する。

・残す建物はグリーンアリーナ、こども文化科学館、ファミリープールなど。建て替える建物は商工会議所、PL教会、青少年センターなど。新規建物はこども健康福祉センター（こども図書館併設）、瞑想空間、地域冷暖房プラントなど。ハノーバー庭園は移設し、そばにカフェテラスを配置。

基町中層団地は取り壊し、鳥観図から推察すると森の中に高層ホテルかコンベンション施設(?)を配置。

現状の機能をできるだけ生かしながら更に発展させる空間形成は建築家らしい発想。

・歩行者ネットワークの強化策としてのたまご状歩道橋や原爆ドームとつなぐ地下広場、丘の中央に空けられたスリットから望む原爆ドームなど、随所にアイデアがあふれている。

・あえて課題を見つけるとするならば、球場跡地の自由広場と基町環境護岸が祈りの丘で分断されているところか。しかし、この案は祈りの丘が最優先なので、自由広場と川辺の一体化は難しい。

・この提案は障害が少ないので、決まればすぐ実行できそうだ。もし実現したとするならば、祈りの丘が名所となり、平和記念公園～原爆ドーム～祈りの丘～広島城の観光コースが喜ばれ、世界市民の森でくつろぐ人々を多く見かけるであろう。

・この地区は日本にとって、世界にとって掛け替えのない存在である。いつまでも手をこまねいて放置せず、計画を決定すべき時が迫っていると多くの人が感じているのではないか。

(編集委員 瀧口信二)

*参考資料：被爆100年広島市中央公園アイデアコンペ受賞作品

<http://www.urban.ne.jp/home/idea/houkokusyo/jyusyousakuhinn.pdf>

□ 編集後記

平成が終わり、新しい元号のもと「まちづくり」も今一度これまでの歩みと現状を顧みて、これからの間違いのない道を考える時がやってきました。

改めて、戦前から戦後にかけて、名古屋や東京の都市計画に携わり、のちに早稲田大学教授となった石川英耀氏の次のことばが思い浮かんできます。

「私は30年もの間、都市計画のお話をしつづけてきました。私は世の中でこんな大切な、こんな面白いお話はないものだと思っています。しかし結局大人はダメでした。大人の耳は木の耳、大人の心臓は木の心臓です。そして大人は第一、美しい夢を見る方法を知りません。

夢のない人に都市のお話をしたってムダなことです。子供は夢を見ます。星の夢も花の夢も、天の夢も百年後の日本の夢も。それは子供の耳が兔の耳の様に大きく柔らかく、子供の心がバラの花の様に赤くそして匂うからです。子供にお話しする事を忘れていた私は、何という手抜きをしていた事でしょう。それに第一、子供こそ、明日の日本の建設者です。」



これは、氏が著した中学校教科書副読本の冒頭の文章です。発行は昭和23年です。そして「社会に対する愛情—これを都市計画という」というむすびの言葉で締めくくられています。理想の社会を思い描く想像力こそが何より大切なことなのです。次の時代の子供たちに夢と希望をバトンタッチできる私達でありたいですね。

(編集委員 前岡智之)

***メルマガを読まれての感想や質問及びひろしまのまちづくりについて
皆さんの自由な提案・意見をお聞かせください！**

(投稿は500字程度でお願いします)

編集委員

石丸紀興	広島諸事・地域再生研究所主宰
高東博視	心豊かな家庭環境をつくる広島21理事
瀧口信二	広島アイデアコンペ実行委員会事務局
通谷 章	ガリバープロダクツ代表
前岡智之	中国セントラルコンサルタント代表